

第二章 安西甘州高昌地方の回鶻

回鶻が黠戛斯に攻められて潰裂するや、烏介可汗に率ゐられて南したるものゝ外、一支は葛邏祿で、一支は吐蕃に、又一支は安西に投じたることは前に述べたるが如くなるが、其の後葛邏祿及び吐蕃に入りたるものゝ消息につきては、之を尋究すべき記載の存する無し、只當時葛邏祿の領地なりしこと疑無き地方に於て、後世回鶻の一部が據りしことは、明かなる證據の存するあり、其の一例を擧ぐれば、金史粘割韓奴傳に「大定中（一一六〇—一一九〇）回鶻移習覽三人、至西南招討使貿易、自言本國回紇鄒括番部、所居城名骨斯訛魯朶、……耆老相傳、先時契丹至、不能拒、因臣之云々」と記せり、之に據れば大定年間に於て虎思訛魯朶の地には、回鶻の一部なる鄒括番部が據りたるものなること疑なし、而して虎思訛魯朶は、遼史金史等に、西遼の都したる所として傳へらるれば、回教徒史家の所謂 Belasagun の別名なるべく、^{〔二四九〕}其の地は耶律楚材の西遊錄に従へば伊列河即ち Ili 河の西に在りとし、回教徒史家に従へば Talas の東方に在りとし、^{〔二五〇〕}而して又元朝秘史には乃蠻の古出魯克罕の敗走するや「垂河（Chu R.）に居る合刺乞荅惕の古兒罕に會ひに往きけり」と記せば、^{〔二五一〕}古兒罕の居住せる都城即ち虎斯訛魯朶、或は Belasagun と稱せられたるものは、Chu 河附近に在りしが如し、之を Ili 河以西、Talas 河以東の何れの地とするも、唐の至德年間後「徙十姓可汗故地、^{〔二五二〕}盡有碎葉怛羅斯諸城」と記さるゝ葛邏祿の據りし地域中に當れるものなれば、大定年間此處に於て回鶻の一部が、もと葛邏祿の所領の地に居りしものなるは疑無し、然れども此の回鶻が果して開成時代に漠北より遁れて此の地方に入りしものか、或は其の以前、若しくは其の以後の起原を有するものなるかに就き